

---

## Specisl Force School (特殊部隊学校)

ACE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Special Force School (特殊部隊学校)

### 【Nコード】

N3768Z

### 【作者名】

ACE

### 【あらすじ】

世界中の地図の一部にしか載っていない日本の領海にある島で繰り広げられる学園と戦闘のオリジナル小説。

主人公の東出 将は2年なのに特殊部隊への推薦がくるほどの実力者だ。

そして将の幼馴染の志倉 茉都香とその他の個性的なキャラによる小説です。

## 第一射

「おはよー」

女子が後ろから飛びかかってきた。

「おっとと、危ないだろ！！」

「将なら大丈夫だってww」

「お前なあ、まあいいか」

俺は東出 将（ひがしで しょう）

SFSの二年生だ成績はいい方で特殊部隊への入隊試験には合格した。だがここで特殊部隊に入ってしまうと中卒になってしまうからここに残り卒業後特殊部隊に入ることになっている。

後ろから飛びついてきたのは志倉 しくら 茉都香俺の幼馴染だ。まどか

そしてSFS唯一の女子である。

過去には何人かいたみたいだが現在一年から三年まで合わせても2人しかない。

そしてもう一人の女子は……最強だ。

SFSには一番強い人が生徒会長になるという伝統があるのだ。

そしてその生徒会長がもう一人の女子ねのである。

朝から茉都香と話していると周囲から妬みの視線が向けられていた。中には銃を抜いているやつまでいた。

「森山とめるな！俺にあいつを撃たせろ！」

「高橋、学年かわって早々殺人は御免だぜ。」

先ほど俺を撃とうとしていた方は高橋 真司（たかはし しんじ）はとてもバカだ。すぐに銃を抜こうとする。

もう一人は森山 辰雄（もりやま たつお）といいいつも高橋の暴走を抑えているしっかり者だ。普段は俺と茉都香、高橋、森山の四人で話してることが多い。

「チイツ」

高橋は舌打しながら愛銃のS & a m p ; W M K 2 2 M o d 0をショルダーホルスターにしまった。

（いまさらだがさすがS F S って感じだな）

高橋の銃のS & a m p ; W M K 2 2 M o d 0は別名ハツシュパピーといい世界の数多くの特殊部隊や軍隊で採用されているおもに暗殺に使われる銃だ。だが精密にできているため精度がよくS F S で使用している奴も多数いる。

ちなみに森山の銃は四六時中M - 2 0 0 を持ち歩いている生粋のスナイパーだ。一応サブ装備としてM 9 2 F のミリタリーモデル（ベレッタ）を持っているが使っているところは見たことがない。

「ところでさあ今日の一限目のやつ自身ある？」

森山が気を使って話題を変えてくれた。

一限目のやつとは爆弾の解体実習のことである。S F Sはあらゆるテロに対応するため爆弾解体や飛行機への突入実習などを行っている。

これらの実習は、基本二人一組になり小隊単位で行っている。ちなみに六人組を中隊といいその中の二人組を分隊と読んでいる。

「十、九、八・・・」

「やべえ尾松がカウントダウンはじめやがったぞ!!」

尾松とは生活指導の先生でアメリカ人と日本人のハーフでアメリカ海軍にアメリカ国籍を持つていないのに血が混ざっているという理由ではいつていかも重要職についていた経歴を持つている鬼教官である。

「急げ急げ！新学年から遅刻はいたいぞ」

こんな時でも高橋のテンションは高い。

「ゴメン将!!」

茉都香からのいきなりの謝罪に混乱していると踏み台にされて俺は倒れた。茉都香はジャンプのおかげで「五」で校門を抜けた。俺は0.5秒で起き上がり走り出・・・

ドタッ

「ゴメン志倉さんの事わすれたわけじゃないんだ。」

せなかった。高橋に足をかけられて盛大に転けた。  
転んだせいで間に合わなかった。

肩に手が置かれた。

（茉都香かなあ・・・慰めてくれて・・・）

肩に手を置いていたのは尾松だった。

（・・・うう、吐き気が。）

「残念だが規則は規則だ。」

尾松がニツコリ笑顔で言ってきた。

その後俺は数枚の資料と原稿用紙十枚分の反省文を書かされた。

## 第一射（後書き）

どうもいるよう投稿のACEです。

読んでくださった方本当にありがとうございます。

なお作者は学生で今受験を控えているため更新が不定期になったり  
前期選抜で落ちると更新が止まることがありますのでその点を踏ま  
えてください。

駄文ですがこれからもよろしくお願いします。

## 第二射

反省文を書き終えた俺は教室に向かって歩いていった。

新学年になりクラスが変わった事により教室がガヤガヤしている。

とおってもニクラスしか無いので約半分は同じメンツなのだから・

・

（なんで遅れてすぐに反省文なんだ！？普通は後日提出とかじゃないのか？）

と考えていると自分の教室についた

「おはようございます。諸事情により遅れました。」

和やかにドアを開けたら先程の高橋が発砲して来たので二点バースト（改造により実現）に桜シグを切り替え初弾装填を高速で行い一発目を高橋の放った弾にあて逸らしつつ、二発目を高橋の脇腹に当てた。

「グハッ」

高橋が悶絶しているうちに席についた。

そこで「朝はごめんね」と茉都香が手おあわせて言ってきたので

「気にするな、お前までなら間に合ったのに・・・悪いのは高橋の奴だ。」

と返しておいた。



「オクレテスイマセン」(遅れてすいません)

未だに日本語が片言なアインシュタイン三世が入ってきた。

この人はアインシュタインの孫で能力もアインシュタイン並だ。

俺の桜シグはフルオート・セミオート・二点バースト・三点バーストと切り替えができるようになっていて。この改造をしてくれたのはこの先生だ。

本来なら違法改造なのだがこの島に籍を置くのにのみ改造を認められている。(各銃メーカーの代表を脅して認めさせた。)

そのため自由に改造できる。この制度のためにアインシュタイン三世はこの島にいるのだ。

そうこうしているうちにHRが終わって最後の連絡を伝えようとしている時に>ボタン!<

ドアを勢いよく開ける音がして

「東出!至急作戦室だ!チムメン連れて来い!」

「了解!高橋・森山・茉都香・岡本・山田来てくれ。」

いつもの4人+岡本・山田という6人チームで動くことにした。

岡本は重歩兵でベネリのM4 3inchモデルをぶっ放しても反動なんてないののように連射する巨漢の持ち主だ。

山田は岡本とチームを組んでいるやつで、愛銃はVZ・58という精密型の銃だ。岡本の影から相手に正確な射撃をすることができる凄腕の持ち主である。

「何があつたんだろう？」

とみんなで話しながら作戦室に向かう俺たちであった。

## 第二射（後書き）

どうもACEです。

2射を読んでいただきありがとうございました。

一生懸命頑張りますのでどうぞよろしく願います。

感想・誤字脱字・要望等よろしくおねがいます。

### 第三射

「現在訪問中のオーストラリア財務大臣が誘拐された。」

「「「「「「!?」「」「」「」」

「質問いいですか？」

森山が許可を求めた。

「なんだ？」

「なぜSATではなくここなんですか？」

「今回の財務大臣による訪問が非公式だからだ。」

「!?わかりました」

財務大臣が非公式での訪問だったためニュース等になっていなかった。そのため俺が事件を予想出てなかったというわけだ。

「現在犯人たちは広島県霜月高校そうげいこうに立て籠もり中だ。東出のチームで制圧してくれ」

「「「「「「了解!!」「」「」「」」

「全員防弾チョッキ・メット等を夜襲用に変更して第二ヘリポート集合だ。」

「『『『『了解』』』」

ここで説明しておこう。

夜襲用とは迷彩服が黒で防弾チョッキも黒、メットも黒という夜に着ることが多い服装にN V G（ナイト ビジョン ゴーグルの略だ）を装備したものだ。マズルフラッシュ（発射時に発光した光のこと）による失明を防ぐためすべての銃にサイプレッサーを付ける。

そして岡本はM 4ではなくこういう時のためのA K - 7 4を持ってくるように指示した。

「俺は単独で、茉都香と高橋、岡本と山田のペアと森山の狙撃という小隊に分ける。ヘリに乗り込み装備の最終確認だ。終わり次第でるぞ！」

「『『『『了解』』』」

### 第三射（後書き）

どうもACEです。

第三射を読んでくださった皆様ありがとうございました。  
いつも文字数少なくてすいません。  
でも学生ということで許してください。

ではSFSをよろしく願いますm（ ）（ ）m

#### 第四射（前書き）

すいません

読む方に夢中でした。

いるかわかりませんが待っててくださった皆様有難うございます。

では第四射どうぞ！！

## 第四射

「到着まで5分です。」

「わかりました。」

護送担当のヘリの運転手が告げてきた。

「夜襲用パラシュートの確認しとけよ」

今は先生の前ではないので堅苦しい言葉遣いはしていない。

「着きましたが50m近く離れた場所ですので西の方角に飛んでください。森山さんは西南西の方角にあるビルからの狙撃が良いかと思われます。」

ヘリの運転手による説明どうりおりて無線機で突入のタイミングを図ることにしたその瞬間「タン！」高めの独特の音恐らくXD9らしき発砲音が聞こえてきた。

「森山！スコープで状況確認してくれ。」

「財務大臣が何かを言ったため威嚇されたようです。」

「ありがとう。30秒後突入だが今回は静かに制圧だ。全員サイプレッサーつけて待機しろ。」

- - - - -



「GO！」

無線でそう告げるとそれぞれが門番を一撃で仕留めて「静かに」戦闘が始まった。

高橋Side

「GO！」

将の合図により俺が一撃で門番の息の根を止めた。

今までに任務で何人も殺してきたためその辺の感覚が鈍り殺してもあんまり気にならない。

そのまま静かにドアを開けて入って行った。

Side out

岡本Side

「GO！」

「いくもこっ!？」

突入の合図がでてテンションが上がり叫ぼうとしたところで山田に口を塞がれた。

「ナイス山田！」

とお礼を言いつつAKのハイパワーで門番を悶絶させたあと縛って

茂みの方に捨てておいた。

入ったらいきなり見回りがいてビックリしたが山田が正確に首の頸動脈を銃弾で断ち切り悲鳴をあげる暇もなく絶命した。

「岡本は今回はただの殲滅しないんだししっかりしてくれよ！」

「うう・・・わかった」

財務大臣の事を肝に命じていて行動すると思った。

S i d e   o u t

## 第五射（前書き）

本日は二話目です。

## 第五射

森山Side

僕はアインシュタイン先生の魔改造でM・200にサイプレッサーをつけている。

3人が入って行ったところ以外に2箇所入口を確認し門番を狙撃し射殺した。

その後はしばらく財務大臣のいる部屋を観察することにした。

Side out

俺は曲がり角で先を確認するために鏡を使おうと思いポケットから出し壁から出して確認しようとして時「ダダ！」鏡を打ち落とされた。

「チッ！」

静かに舌打しながら少しじょそうをつけてスライディングしながら相手の足に3発当ててこかした。

すると相手が上半身を少し起こして乱射してきた。

そのうちの数発が防弾チョッキやメットの当たった。

衝撃はあるが特注のレベル？の防弾チョッキであるため貫通どころか骨折などもなく直ぐに反撃し相手は被弾し意識を手放した。

俺はマガジンを変えつつ森山に連絡をとった。

「他の2組の状況はどうだ？」

「今は制圧し終わって残りの敵は部屋の4人だけです。今は将の所に向かっところですよ。」

「ありがとう。大臣の周りにホシはいるか？」

「一人が近くにいます。」

「わかった。合図でそいつを頼む。」

「了解。」

.....

「じゃ30秒後にフラッシュたいて突入するぞ！」

「「「了解！」「」「」

「森山は大臣近くのやつ頼むぜ！」

「わかってるって」

.....

「よし！GO」

俺の合図で突入した。

森山が一人ライフルで倒して、俺が足に2発と横腹に1発で一人倒して、山田と茉都香が一人ずつ倒して財務大臣を救出した。

茉都香が財務大臣を連れて外へ行き犯人を回収しようとした時・・・

「道連れだああ!!」

犯人グループの一人が手に爆弾のスイッチらしきものを押そうとした。

「調子に乗るな!」

高橋が手首のあたりに銃をうちに方から先を吹き飛ばした。

「後はうちの別働隊に任せるとするか。」

SFSでは急ぎの任務が飛び込んてくることが多数あるため先行隊が強襲し、別働隊が回収するというパターンになることが多い。

「んじゃ帰りますか。」

こうしているうちに全員が犯人グループを一箇所にまとめて応急処置や拘束を終えたので集合地点へ向かうことにした。

## 第五射（後書き）

土曜日ということでも話あげさせてもらいました。

これからよろしくお願いします

## 第六射（前書き）

相変わらず駄文ですがよろしく願います。



## 第六射

「よくやったぞー！お前らガッハハハ」

学校に帰ると尾松が褒めながら高笑いしていた。

「ありがとうございます。」

素直にお礼をいっていると、向こうからハゲ頭の鶴羽花校長つばなはなが走ってきた。

「君たちオーストラリアの総督さんが表彰したらしいからオーストラリアにきて欲しいそうだ。」

「わかりました。」

――――

「えーせっかくオーストラリア行くのに2泊かよー！10泊ぐらいしてこうぜ。どうせ学校が金出してくれるんだしよ」

「そうだそうだ。」

高橋がグダグダいって岡本も高橋の意見に賛成している。

「そういう考えは良くないよ！」

2人は茉都香に注意されて静かになった。

「それに今回はお松もついてくるんだぜ？」

俺がそういうと高橋と岡本が座り込んで「もう嫌だ」とか「よりによって尾松かよ！」とかぐちっている。

「おーい！悪い待たせたな。」

「『『『『『荷物多い！！』『』『』『』」

全員揃って驚いた。

何しろ尾松は大型トラック使わないと運べないような荷物をリヤカーで運んでいたのだ。

「先生8割おいて行きましようね」

「???まあいいが何故だ??」

そんなに飛行機に乗り切らんわ！と心の中で突っ込む俺と高橋・岡本であった。

「それじゃあ乗り込もうか。」

尾松が促してみんなが金属探知機を通ろうとして最初に尾松が通ろうとして――

「ピーーーーーー」

――金属探知機に反応した。

さすが教員！ライセンスを見せて別室に行きSFS特有の決まりを説明されることになった。

- - - - -

「一応銃は許可しますが、アサルトライフルやマシンピストルなどの連射武器やショットガンのような拡散するようなものライフルのように目立つものはやめてください」

あるいみほとんど禁止されたぞ！とかおもっている

「つまりハンドガンのみってことだな？」

高橋が俺の質問を代弁してくれた。

「まあ実質そういうことになりますね。」

皆が「決まりならしょうがない」という気持ちでメインの武器を出していったのだが一人が出している武器で驚いた。

今回、尾松は黒のロングコートできたのだがその内側には10丁を超えるマシンガンやアサルトライフル、ショットガンが入っていたのだ。

そして空港の係員に頼んで鞆をとってきてもらい服の中にあつた銃とハンドガン系に入れ替え始めた。

コルトのM1911（ガバメント）やパイソン、デザートイーグルやM92Fミリタリー（ベレッタ）といった銃に入れ替えていき結局12丁を服の中に入れた。

当然皆は啞然としている。

もちろん数の多さにだがみんな口に出さずに無事搭乗することができた。

## 第七射（前書き）

遅くなつてすいません。

しかも短いです。

最近父が家にいて執筆出来ませんでした。  
では第七射どうぞ

（言い訳です）

## 第七射

オーストラリアまでというのは案外遠いもので8時間かかる。なの  
にすることはトランプぐらいでとても暇だ。

今は大富豪をしていた。大富豪といっても高橋以外大富豪に1度も  
なれていない。

高橋はトランプゲームでは最強なのだ。

しかしその大富豪も飽きてしまいやめてしまった。

各自携帯ゲーム機は持ってきてはいるがすでに充電がきれている。

唯一森山だけは電池で充電できる充電器を持ってきていてまだi  
padをいじっている。

横目で内容を見るとペガサスというテロ組織の交信用の掲示板だっ  
た。

ペガサスは世界有数のテロ組織でNo.3と言われている過激派集  
団だ。

宗教の枠を超えてめちゃくちゃしたいやつが集められている。

しかしその掲示板は世界中の警察などが精鋭を投入してもまだ開  
けていない所じゃないのか？とおもったが黙っておいた。

ペガサスは活動が最近活発になってきているらしい。

そんなことを考えていると森山が紙に何かを書き出した。

「これを尾松先生まで」

といって俺に渡してきた。  
回せということらしい。

森山のいうとおりに尾松まで回ってお松が読み終わった。

「なんだって!!」

ダダダダダ

尾松が大声で叫んだのとのほぼ同時にマシンピストルを連射する音が聞こえた。

「「「「「「!?!?!?」」」」」」

森山と尾松以外は尾松の声と銃声に驚いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3768z/>

---

Specisl Force School (特殊部隊学校)

2011年12月21日17時49分発行